

に残っている時が暗さとながっているのも不思議である。

時間と場所の他に、表情の暗さもある。家庭の状況や塾通い等で緊張を強いられがちな子どもにも、園では身も心も晴々と遊んでほしいと願うが、暗さも

## 「暗い」は大事

大多和 檀

「暗い」からイメージされることの一つに「怖い」があります。これは保育の中で結構大事な事ではないかと考えています。

私は常日頃、子供たちにまず必要なものは、土・

あって当然なので、それをそのまま、安心して出せるようにしたい。ふとした表情の陰りが、少しでも癒される場になったら、どんなにいいだろうかと思う。



水・太陽とと思っていますので、入園から天気の良い日は砂遊びや水遊びなどを中心に過ごしています。そうして自然の変化―曇りの日、雨の日、寒い日など―を体で感じ始める頃、また友だちとのかわり

も楽しいばかりではない時もあると感じ始める頃、子供たちが見つけてくるものが、「暗い」ことです。「今日は暗いね」「ここ暗いね」「何か出てきそう」「何かあるんだろう」と……。

私が昨年三月までいた園では、こんな頃になると暗い所から「大多和ゾンビ」なる者が出てきました。姿形は大多和先生なのに、目が変で、「ゾンビ〜〜〜」と怖い声で言うのです。これが出ると子供たちは一目散に他のクラスの先生の所に逃げて行きます。何人かは「怖くないもん」とヘラヘラ笑いながら近付いてきますが、更に「ゾンビ〜〜〜」と抵抗せずに寄って行くともう大変です。顔が真剣になって逃げ出します。みんな集まって「ゾンビは明るい所が嫌いなんだ。だから明るい所に逃げよう」「光る物に弱いぞ」と先生と相談して金紙で武器を作る人もいます。

機を見て（ここが難しいところです）「みんなどうしたの」の大多和先生に戻って登場すると、一斉

に「大変だよ、ゾンビが出た」「顔は大多和先生そっくりなの」「黒いもん着てた」としゃべりまくり、泣いてだっこしてもらっていた人は今度は大多和先生にだかれます。そしてゾンビの出た暗い所に金紙をはったり、懐中電灯を持って見に行ったりして「もう大丈夫」「怖かったね」と言いつつ日常の遊びに戻っていきます。

なぜこんな遊びをするのか？

それは明には暗が、強には弱が、長所には短所がというようにすべて一方が欠けていては成り立たない、人の生活とはそういうものなんだということ、そして明は暗に支られている、だからこそ暗いものに「おそれ」の気持ちを持ってほしいのです。

自分の心の中にかか、「怖い」と思う気持ちをほんの少し持って生きてほしいと思っています。

ですから幼稚園という場も、全てが明るくきれいで美しいというのではなく、暗い所、きたない所もあってほしいと思います。人間が生きて生活してい

ればどうしても避けられないのですから。

もう一度、ゾンビ遊びのことですが、この「ゾンビ」は、それまでの保育の中で「自分は先生から受け入れられている、愛されている」と子供が感じ、自分のクラス以外にも、「頼れるところがある」という条件がなければ出現しません。そうした「明る

い」生活がなければ、保育者同士にも「明るい」関係がなければ、ゾンビはただ子供を怖がらせるだけです。「明るい」があつてこそ「暗い」で、その「暗い」があつてこそ「明るい」はさらに「明るい」となる、だから「暗い」は大事と。

(東京都港区立神明幼稚園)

## 「暗い」オランダ

向山 陽子



「ああ、オランダに帰ってきたね」

視界一八〇度全てを覆い、どんよりした曇り空と、見ていてあきない程、常に変化する厚い雲。陸路でも、空路でも、オランダに入るとため息と共に

行手を覆う空を見て（オランダでは、空は見上げなくともよいのです）つぶやいたものです。そして、次のバカンスⅡ南への旅まで、この天気になげずになんばろうと気をひきしめるのです。昨年夏は、